

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：畔上 毅 所属：東京都立光明特別支援学校

記録日：2016年2月9日

キーワード：肢体不自由、社会生活、コミュニケーション支援

【対象児の情報】

・学年 高等部2年

・障害名 脳性麻痺による上肢機能障害（両腕）・移動機能障害

・障害と困難の内容

本生徒は日常的に電動車いすで生活している。両腕が前後左右30cmほどしか動かすことができない。知的には能力が高く、準ずる教育課程で学校では授業を行っている。昨年度教科学習でiPadを使用し授業板書や宿題などに取り組み学習面での困難は解消されつつある。発語が難しく身近な教員でさえわからない時がある。伝わりづらい言葉は文字盤を使用していて、本生徒と他の生徒同士のコミュニケーションはほとんどなく他の生徒から聞かれたことにYes/Noでの返答がほとんどである。本生徒の困りというのはこの自分の気持ちや相手に伝わらないという部分で、これも含め生活面での自立という部分が大きな課題となっている。

卒後は生活介護の施設が進路先となりそうだが、本生徒は知的には高いので活動に物足りなさが出てしまう。しかし身体的には作業のような活動は難しい。コミュニケーションの課題をクリアにすることで本生徒の長所である知的に高いところを活かし、本生徒がどのような場所を活動の拠点としてもICTを活用することで少しでも質の高い生活をできるように取り組んでいく。

【活動目的】

・当初のねらい

コミュニケーションの課題を中心としてとして以下の3つのねらいを柱とした。

(1)身辺自立について

学校内での自分の身の周りのことを可能な限り自分で行う。

(2)自分の意見の表明について

iPhoneを活用しドロップトークなどのVOCAを用いることで意見の表明を図る。

(3)経験について

一人での買い物などを経験し、できることを増やす。

・実施期間

平成27年5月25日から平成28年2月9日

・実施者

畔上毅・橋本一郎

・実施者と対象児の関係

教科担任・学年担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

(1)身辺自立について

何かを自分一人で経験することがほとんどなく提出物やコピーなどは教員や周りの大人が行っていた。周りの教員が確認して提出物や宿題を出して確認する。つまり、何も言われなければ自分からは言い出さない状況の中で生活していた。

(2)自分の意見の表明について

本校独自の他校との交流セミナーでは話を聞いて笑っているだけで自身の意見を伝えることはなかった。大学見学や職場見学などでの自己紹介では内容を考え話をするが日頃関わっている教員でないと言っているのかが伝わらず、教員が復唱してコミュニケーションをとっていた。

(3)経験について

一人で外出する経験はなく、欲しいものは周りの大人に依頼していた。また、買い物の経験はほとんどなく、学校行事で買い物に行った時はお金を払うことも意識の中になく、お財布の場所もわかっていなかった。

・活動の具体的内容

(1)身辺自立について

iPhoneを使用して職員室等での身辺に関わる取り組み。

①経営企画室への書類の提出。

②職員室でのコピーの依頼。

アプリ「かなトーク」を用いて事前に想定される依頼文を一つの定型文として本人が考えて入力、教員は後ろからついていき入室時から生徒一人でというやり取りを1回行った。対応はほとんど関わったことのない職員で書類の提出を行い入室の挨拶「失礼します」から受け取ってもらうまでの「よろしくお願いします」までを入力し取り組んだが今回は想定していた内容で対応できた。今までも発語のみで5、6回ほど挑戦していたがほとんど伝わらず職員が状況やプリントをみて本生徒の伝えたいことを汲み取っていた。しかし今回のアプリを使用することで準備さえすればしっかりと伝えたいことが伝わるという経験をする事ができた。この経験は卒後にどんな施設や環境へ行っても通用する自信となって様々な活動に取り組み、いろいろな人とのコミュニケーションを取るための一歩であると考えられる。活動の課題としては想定外の反応に対応できるかという点になる。

(2)自分の意見の表明について

本校独自の他校との交流セミナー、大学見学や職場見学などでの自己紹介や交流の場面でiPhoneを使用した自身の意見の表明。

同じくアプリ「かなトーク」を使用し、発表用の原稿をプレゼンテーションアプリ「keynote」スライドごとに定型文を作成し、スライドを進めながら対応する定型文を発表するという形をとった。iPadとiPhoneを交互に操作して円滑に発表できた。こちらも発表内容が決まっていたので事前準備で対応できる内容であった。当初予定していた、他生徒とのコミュニケーションはスケジュールの都合で行うことができなかった。

(1)(2)の活動でのデメリット

「かなトーク」の発音のイントネーションが若干不自然であること、OSのアップデートで最新のバージョンに対応しなくなったことが挙げられる。

交流会での発表の様子



(3)入力に時間がかかるため定型文を利用し日常的なコミュニケーションや外出時の買い物で活用

かなトークと同じVOCAである「指電話」を使用した。日本語のイントネーションがよく定型文登録時の操作性がすぐれているため、買い物や交流会の司会など定型文を入力しておくことで打ち込む時間を短縮できる活動に対して使用した。1回目は教員がそばで見守り一緒に買い物をして徐々に補助の内容を減らした。4回ほどで教員は店外で待機、本人が一人でお店の中へ行き買い物を済ませて出てくるということができた。

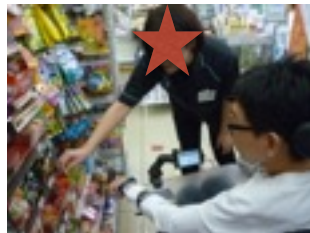
買い物の様子

①学校近くのコンビニへ

②目的の商品売り場へ

③指電話で伝える

④無事買い物が出来た



・対象児の事後の変化

機器面

実機はiPhone5で使ってみると「小さい」との感想がでた。周辺の支援機器に対してあまり意見を持たなかった生徒が、『自分にとって使いやすいもの』という感覚がでてくるようになった。以前まではテーブルの高さなどが使いづらくても、何も言わず受け入れていた。この研究を通して生徒が使いやすいサイズのタブレット端末を購入した。またその端末を電動車いすのコントローラーで操作できるよう周辺機器の購入もした。

コミュニケーション面

以前までは「あってもなくてもどちらでも良い」という感想であったが、このアプリを使用することで「このアプリを使用すれば自分の気持ちが伝わる」という思いが芽生えてきた。さらに、やすい有料アプリの音声エンジンは「いやだ」と正しいイントネーションでコミュニケーションを取りたいという気持ちがでてきた。購入した新しい端末を、家庭から車いすに装着してくるなどコミュニケーションに対する意識の変化が見られた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

自分の意見を伝えようとする場面が増えた。→首をかしげてごまかしたりする場面が多かった生徒が、ほとんどなくなり、自分の知っている知識の中で答えようとする場面が増えた。

発言の内容が濃くなった。→「すごいと思った」「怖いと思った」などの短い発言だったものが「怖いと思った。これからは・・・」と自分の意見を付け加えられるようになった。

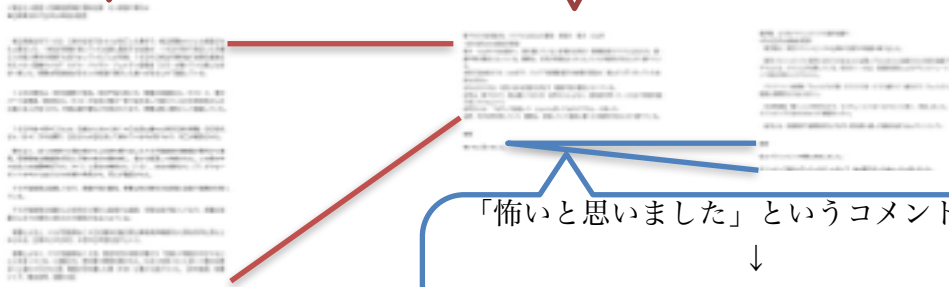
・エビデンス（具体的数値など）

気持ちの言語化が得意ではなかったが、最初は教員と一緒にいき見守っての買い物学習であったが、指電話のアプリを使用することで一人でも買い物ができる、という実感が湧き最終的には店内での買い物を一人で行うことができた。発表ニュースの原稿も2分～5分ほどであったものが、感想も含めて1分ほどの発表にまとめることができるようになった。

初期のまとめはネットの記事の丸写しであった→量が適切になりコメントの量が増えた

初めはネットのニュースの丸写しであった。
全てを音声出力すると5分以上。

回を重ねるごとに1分ほどの発表にまとめることができた。



「怖いと思いました」というコメントから
↓
「私もその活動に参加しました。選手と試合をして、私が勝つことができました。」話を膨らませることができるようになった。

・その他エピソード（画像などを含めて）

買い物学習に協力してくれたコンビニの店員さんは本生徒が一人で店内に入り買い物をした、その経験自体が初めてだと知り、驚き、そして達成できとことに感動し涙していた。学校の近くに有るコンビニで、近くに特別支援学校があることも知っている。しかし、実際にどのような生徒が勉強しているか、などの様子までは知られていないという現状も知ることができた。地域に知ってもらい、また知ることができた取り組みになった